

10-3 「からだは資本」論考……賃金奴隷

「弁護論的な経済学者たちが事柄をまちがって説明しているということは、次のようにすれば最もよくわかる。…彼らは次のように言う。…売り手——労働者——は自分の商品——労働力——を貨幣に転換してこの貨幣を収入として支出し、まさにそうすることによって自分の労働力を絶えず繰り返して売ることができるようになり、またそのようにして自分の労働力を維持することができるようになる。だから、彼の労働力は、それ自体、商品形態にある彼の資本なのであって、そこから絶えず彼の収入がわいてくるのだ、と。……この意味でならば、奴隷もまた資本家である、……なぜならば、この商品——労働奴隷——の性質は、その買い手が毎日繰り返してそれに労働をさせるだけでなく、絶えず繰り返して労働することができるように生活手段をも与える、ということに伴っているからである。」（大月版『資本論』③P541F6-542F4）